

平成30年6月10日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02620

研究課題名(和文) 文法項目の再編に向けて 認知語用論の視点から

研究課題名(英文) Reconstructing English Grammar in Terms of Cognitive Pragmatics

研究代表者

内田 聖二 (UCHIDA, Seiji)

奈良大学・教養部・教授

研究者番号：00108416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は認知語用論としての関連性理論の概念を用いて英文法を見直し、文法項目の再編を目指すものである。具体的には、高次表意、テキスト現象などに焦点を置いて、新たな視点から文法の体系化を試みたものである。

成果の一端は、28年度に英語語法文法学会第24回大会(奈良大学)でのシンポジウム「Spoken EnglishとWritten Englishをめぐって」の司会、講師として、また、29年度には日本英語学会第35回大会(東北大学)でのシンポジウム「慣用表現・変則的表現から見える英語の姿」の講師として発表し、従来の文法では説明できない言語現象を認知語用論の観点から解き明かした。

研究成果の概要(英文)：The present research aims to reconstruct English grammar in terms of relevance-theoretic concepts, especially focusing on higher-level explicature phenomena and tense agreement in text, which have not been fully explained from traditional grammatical standpoints.

Two symposium papers were presented at the 24th conference of the Society of English Grammar and Usage (2017, Nara University) and the 35th conference of the English Linguistic Society of Japan (2018, Tohoku University). The 2017 paper discussed a unified pragmatic approach to spoken and written English and the 2018 focused on tense agreement in text. The former paper was published in the 2017 journal of the Society of English Grammar and Usage.

研究分野：語用論

キーワード：関連性理論 高次表意 テキスト ダイクシス 一致現象

## 1. 研究開始当初の背景

ダイクシスをメタ表象という観点から遂行された、平成17年度から19年度にかけての基盤研究(C)「メタ表示能力と言語獲得に関する認知語用論的研究」(研究代表者:内田聖二)において明らかになった点のひとつに次のことがある。

(a)ダイクシス現象は誰の視点から指示するのかという点でメタ表象能力と密接な関係がある。

また、「ダイクシスから引用へ:認知語用論からのアプローチ」(研究代表者:内田聖二)(基盤研究(C)20年度から22年度)で明らかになったことの一つは以下の点である。

(b)ダイクシス現象とメタ表象能力を「引用」という観点からみることでより広い言語現象がメタ表象能力と関連することが明らかになった。

さらに、「新しい日英語比較対照研究 認知語用論の視点から」(研究代表者:内田聖二)(基盤研究(C)23年度から25年度)では次の点を明らかにした。

(c)日本語と英語との比較ではメタ表象現象の言語化という新規な認知語用論的視点が有効で、高次表意が具現化されるか否かという点で日本語と英語では根源的な差異がある。

以上のような研究成果3点をおもな出発点として、従来の観点から記述されてきた文法項目を認知語用論という観点から新たに見直すことにより、英文法項目の再編が可能なのではないかという着眼点に至った。

## 2. 研究の目的

従来、英文法は伝統文法の枠組みのなかで規範的な項目を中心に記述されてきた。近年、Quirk et al.(1985)やCarter and McCarthy(2006)などでは情報構造、口語英語からの情報などを取り込んだ新機軸がみられるが、基本的な枠組みは変わりなく、そこにいくつかの新しい観点からの章を加えた形になっている。本研究は認知語用論としての関連性理論のなかで発展してきた、メタ表象、高次表意といった概念から英文法を見直し、項目縦断的に新たな視点から体系化を試みるものである。

具体的には、高次表現、照応表現、テキスト現象に焦点を置く。そこでは話しことば、書きことばといった形での区別はせず、いずれの場合にも統一的に説明できる原理を追究する。たとえば、代表的な時のダイクシス項目であるtomorrowは、当然のことながら、(1)のように過去時制とは結びつかない。

(1) \*Tomorrow he had a lunch date with Enid Armstrong.

ところが、この文が(2)のようなテキストに入ると何の問題もなく容認される。

(2) Tomorrow he had a lunch date with Enid Armstrong. He couldn't wait to get his hands on her ring. (M.H. Clark, *Loves Music, Loves to Dance*)

この現象には、ダイクシスとメタ表象の相互作用とテキストの特性が絡み合うメカニズムが働いていることが予想される。

また、引用にはいわゆる話法におけるダイクシスの交替現象や、直接話法、間接話法、自由間接話法(描出話法)といった古くて新しい問題が山積しているが、認知語用論としての関連性理論に足場を置いて、メタ表象という切り口から統一的な説明を試みる。

伝統的に確立している文法項目を認知語用論的視点で再考することで、見落とされていた重要な言語現象を発掘し、文法の再編につながると思われるからである。

最終的には、語用論と意味論、あるいは統語論とのボーダーにかかわる議論に貢献しうると考えられること、一方向へ進むとされる文法化の傾向に対してなんらかの示唆がえられる可能性があること、などの刺激的なテーマにも展開していくことが期待されるのである。

## 3. 研究の方法

おもに以下の点について段階的に研究を進める。

(1) これまで9年にわたる科研の研究成果を本研究の趣旨に沿って整理する。

(2) 関連性理論の最新の進展状況を本研究に関連するところを中心にreviewする。

(3) 「研究目的」で述べた、高次表意の具現、照応表現、テキストにかかわる言語事象、の3点を中心に認知語用論的視点により分析、記述する。

(4) 従来の文法事項を認知語用論的基盤に立って、項目横断的に再編することを試みる。

なお、記述の対象としてはペーパーバックからの実例を主とし、これまでに収集した資料に加え、研究と並行して新たな用例の採集に努める。

## 4. 研究成果

### 平成27年度

初年度は、まず、(1)これまでの科研の研究成果を本研究の趣旨に沿って整理し、(2)関連性理論の最新の進展状況を本研究に関連するところを中心にreviewした。同時に、日本語ではほぼ義務的に高次表意が具現される言語現象に相当する、in case、sinceなどの副詞節や、「というのは」に相当するbecause、forなどの接続節、見たところ高次表意とかわりが薄いと思われる、修辭的if節や'The question/thing/point/problem etc. is S.'などの英語の言語事象を中心に、paperbackからの用例の収集に努めた。

また、メタファー研究会で関連性理論から

みたメタファー現象について lecture を行った。そこでは、メタファーをより一般的に説明する過程で、本研究と関連する連語現象にも言及した。

なお、2015年9月、アントワープでの国際語用論学会、2016年3月、日本大学での社会言語科学会などの関連学会に出席し、最新の情報、資料を収集した。

#### 平成 28 年度

平成 28 年度は引き続きこれまでの研究成果を本研究の趣旨に沿って整理するとともに、paperback からの用例の収集にも努めた。具体的な研究としては、英語語法文法学会第 24 回大会(奈良大学)でシンポジウム「Spoken English と Written English をめぐって」を企画し、司会、講師を務めた。そこでは、「ダイクシス、あるいは時間・場所・人称の一致について」のタイトルで、従来は時制のような一致現象と同一にみなされてこなかった場所の副詞、人称についても時制の一致と同じように扱えることを論じた。すなわち、話しことばでは発話時、場所、それに話し手、聞き手が明確に設定されるが、書きことば、とりわけ、フィクションを典型とするテキストでは、聞き手は読み手という形をとり、そこに書き手、語り手、登場人物が絡みあうことから今までの伝統的な文法の観点では説明できないことを指摘し、認知語用論的な視点からみれば、こういったダイクシス現象を統一的に処理できることを明らかにした。

また、前年度語用論学会のメタファー研究会で行った、関連性理論からみたメタファー現象についての lecture を基にして、本研究と関連する言語現象に言及しながら紀要論文を執筆した。

一方、シリーズ「英文法を解き明かす」(全 10 巻)(研究社)の編者として『話しことばの構造』(第 9 巻)『規範からの解放』(第 4 巻)『文をつなぐ』(第 3 巻)『名詞と代名詞』(第 1 巻)の出版に貢献した。

#### 平成 29 年度

平成 29 年度では、日本英語学会第 35 回大会(東北大学)のシンポジウム「慣用表現・変則的表現から見える英語の姿」の講師として「テキストのテンスとダイクシス」のタイトルで発表し、従来の文法では説明できない言語現象を認知語用論の観点から統一的に説明した。

前年のシンポジウム論文を『英語語法文法研究』24 号に発表した。また、韓国 Inha 大学 Eun-Ju Noh との共著で 'Metarepresentational Phenomena in Japanese and Korean' を『奈良大学紀要』46 号に発表した。

さらに、シリーズ「英文法を解き明かす」(全 10 巻)(研究社)の第 10 巻、『コーパスと英文法』を共同編集した。

本研究の成果を踏まえ、2018年2月20日、

22 日、ロンドン大学教授 Robyn Carston 氏との研究打ち合わせを行った。20 日にはおもに前年の英語学会のシンポジウムのテーマであった一般的な英語時制の用法とテキストにみられる「逸脱」した時制現象を統一的に説明する認知語用論の原則をとりあげ、アプローチの仕方および説明に賛同を得た。また、22 日は、前日に渡してあった、本年度の『奈良大学紀要』に掲載された 'Metarepresentational Phenomena in Japanese and Korean' (Eun-Ju Noh と共著) で論じた高次表意 (higher-level explication) の日本語・韓国語と英語との違いについて議論をした。その差の原因として前者の SOV、後者の SVO という語順にあるのではないかという論文の結論をさらに検証する必要があるということ意見の一致をみた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1 Uchida, Seiji and Eun-Ju Noh, 'Metarepresentational Phenomena in Japanese and Korean,' *Memoirs of Nara University*, 46: 1-23, Nara University, 2018.

2 内田聖二、「ダイクシス、あるいは時間・場所・人称の一致について」『英語語法文法研究』第 24 号、5-20、英語語法文法学会、2017 年

3 内田聖二、「関連性理論とメタファー - より一般的な説明をめざして - 」『奈良大学紀要』第 45 号、1-15、奈良大学、2017 年

〔学会発表〕(計 3 件)

1 内田聖二、「テキストのテンスとダイクシス」日本英語学会第 35 回大会シンポジウム「慣用表現・変則的表現から見える英語の姿」2017 年 11 月 19 日東北大学仙台川内北キャンパス(宮城県仙台市)

2 内田聖二、「ダイクシス、あるいは時間・場所・人称の一致について」英語語法文法学会第 24 回大会シンポジウム「Written English と Spoken English をめぐって」2016 年 10 月 22 日奈良大学(奈良県奈良市)

3 内田聖二、「関連性理論とメタファー - より一般的な説明をめざして - 」メタファー研究会キックオフ・ミーティング、2016 年 3 月 17 日、関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)

〔図書〕(計 5 件)

1 内田聖二、八木克正、安井泉(共編) 滝沢直宏(著)『コーパスと英文法』、研究社、

2017年9月(xii+226)

2 内田聖二、八木克正、安井泉(共編)  
中山仁(著)『名詞と代名詞』、研究社、2016  
年8月(xii+264)

3 内田聖二、八木克正、安井泉(共編)  
大竹芳夫(著)『文をつなぐ』、研究社、2016  
年7月(xiii+227)

4 内田聖二、八木克正、安井泉(共編)  
住吉誠(著)『規範からの解放』、研究社、2016  
年4月(xii+245)

5 内田聖二、八木克正、安井泉(共編)  
澤田茂保(著)『話しことばの構造』、研究社、  
2016年4月(viii+219)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

内田 聖二 (UCHIDA, Seiji)

奈良大学・教養部・教授

研究者番号：00108416

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

Noh, Ein-Ju

Inha 大学 (韓国)・教授